

日本に現存する
最古の和歌集「万葉集」を
わかりやすくご紹介します



藤原麻呂と 坂上郎女

この歌は、藤原麻呂が大伴坂上郎女に贈った歌三首のうちの一首目に当たります。麻呂は藤原不比等の四人の息子の一人で、養老元(七二七)年には美濃国(現在の岐阜県南

をとめ等が 珠匣なる 玉櫛の
神さびげむも 妹に逢はずあれば

訳

少女らが美しい箱に大切にしているりつばな櫛のように、私は古ぼけてしまったのだろうか。あなたにお逢いしないので。

藤原麻呂 卷四(五二二番歌)

部)の介(次官)という地方官でしたが、まもなく都へ戻りました。当時の都である平城京は、朱雀大路を境として東を左京職、西を右京職という役所が管轄していました。麻呂は帰京した後に左右両京職の長官を兼任し、「京職大夫」と呼ばれました。

『万葉集』に収められたこの歌から始まる七首の歌は、藤原麻呂と大伴坂上郎女との間の相聞歌です。その左注によると、坂上郎女は大伴安麻呂(大伴旅人の父)の娘で、穂積皇子(天武天皇の子)の寵愛を得ましたが、皇子が和銅八(七二五)年に亡くなった後に麻呂と交際したとあります。養老六(七二二)年頃に坂上郎女は異母兄の大伴宿奈麻呂に嫁いだとみられますので、麻呂との間で交わされた二連の歌は、麻呂が養老二(七一八)年頃に美濃から帰京した後、養老五(七二二)年に

京職大夫へ就任する頃までに詠まれたものと考えられます。二人が交際できた期間はごく短く、またこの歌や坂上郎女からの返歌がいずれも互いあまり会っていないことを前提とした内容であるため、二人の関係はまもなく解消へ向かったと推察されます。

なお、麻呂の邸宅は左京二条二坊五坪に所在したことが、平城京跡から出土した木簡の内容から判明しています。ここは長屋王邸から二条大路を挟んで北隣の位置に当たります。一方の坂上郎女は坂上里に居住したと左注にあり、父の安麻呂が居を構えていた佐保の近く、平城京北郊の平城山南麓あたりに住んでいたとみられます。双方の距離は二〜三キロメートル程度ですが、男女の仲はあまり長続きしなかったようです。

(本文 万葉文化館 竹内亮)



写真提供：奈良文化財研究所

奈良市佐紀町
奈良文化財研究所
連携推進課広報企画係
☎0742-30-6753



平城宮跡資料館で見ることが出来ます。

藤原麻呂邸の所在を示す木簡群は、二条大路の路面上に掘られた東西に長い濠状遺構より出土したことから「二条大路木簡」と呼ばれています。木簡の实物は奈良文化財研究所が保管しており、複製品は平城宮跡資料館で見ることが出来ます。

平城宮跡資料館 (奈良市)

和歌や作者などに関連するものを紹介するよ!

つぶやき

万葉ちゃんの



万葉ちゃん